



岐路で掴んだ未来



国籍	インド
職種	介護
実習実施者	ウェルコンサル株式会社
監理団体	協同組合ウェル国際技能協力センター

サンジャナ
SANJANA

人生において、岐路に立たされることは何度もあるでしょう。その中で、いつが一番大切なのか。インドでは、高校時代だと言われています。

小学校時代は、世界を認知する時代。中学校時代は、友達を作り、社会を理解する時代。そして高校時代は、社会に参加する準備の時代で、人生の一番重要な岐路だと考えられています。有名な大学に入り、一流企業に就職することは、多くの人が切望する道です。

しかし、この道を進むのは、簡単なことではありません。私は高校時代、それを実感することになりました。家庭の財政状況があまり良くなかったため、希望の大学に行けませんでした。人生の一番大切な道は、私を通してはくれませんでした。

途方に暮れていた時、母が別の道を用意してくれました。それは日本での介護技能実習という、私が考えもしなかった道でした。外国で暮らす不安はあったけれど、私は希望を持って介護技能実習生への道を選びました。

工作中は、利用者様と散歩や昼食を一緒にしたり、話をします。散歩では、歩ける人は歩行器を押し、歩行が難しい人は車椅子に乗りま

す。一人一人に合わせることが、とても大切です。食事もそれぞれに合わせたメニューで、噛むことが困難な人の食事は、ペースト状になっています。こうしたことは、その人の状態を良く知らなければできません。

「相手を良く知る」ということが、もしかすると介護の第一歩なのかもしれません。

仕事を始めた頃は、利用者様の話し相手になって、同じ話を繰り返し聞きながら、心の中で「あ、またさっきと同じ話だ」と思っていました。でも、頷きながら聞いていると、その方の顔はとても嬉しそうに見えます。その時、私はふと祖母のことを思い出して後悔しました。祖母が同じ話を繰り返す時、「おばあちゃんは、どうして同じことばかり言うの?」と言ってしまったことがあったのです。

私は、介護とは何かをしてあげることだと思っていましたが、何もしなくても、相手のことを大切に思いながらただ横にいただけでも、それは介護になるのだと気づきました。相手のことを正しく理解せず、一方的にする行為は、介護ではなく、ただのおせっかいかもしれません。祖母の話も、もっと一生懸命に聞いてあげればよかったと、今は思います。

このような体験ができた介護技能実習生への道を選んだことは、私の人生での一番重要な岐路となりました。綺麗なことばかりではないけれど、介護は、自分ではない誰かの人生に寄り添うことができる素敵な仕事です。

これからも仕事を続けながら、また、福祉を学ぶ学生としても、世の中に介護の温かさを伝えていきたいです。それが、私を支えてくれた方々への恩返しにもなるでしょう。

三年前に日本への道を進んだことで、今またさらに新しい道が見えてきました。それが、とても嬉しいです。